



歴代内務土木局長と其の時代(一)

清水生

最初の局長 故男爵古市公威氏

凡そ一國の興廢はその國の土木政策の如何、換言すれば河川治水道路等の修築改善を備港灣の設備等所謂土木事業の整備發達にありとは至言である。支那に於ても昔より一黄河の水を治むるものは天下に綱業をなす」と唱へられたるを見ても首肯せらるゝ所である。更れば之れが行政府の府たる内務土木局に於て、その當時々々の内務行政の長たる大臣を輔佐して、その衝に當る土木局長の力量識見等

の如何は一國の興廢に影響する處至大なりと云ふも敢て過言ではあるまい。茲に於て歴代土木局長の職を奉じたる人物を詳しく當つて、先づ以て最代の土木局長たる故古市公威氏を擧げねばならぬ。

氏は明治十三年より辭任迄十八年間、内務土木局に就任してゐたが、その土木局長たりしこと實に九ヶ年餘の永きにある。元來古市氏の祖先是藤原武智勝より出であるが、室町幕府時代に至つては左京亮より鎌倉扇谷の上杉定正に仕へてゐたが、明應二年定正の歿後左京亮の子左近將監景

治が畿内に轉じ大和の守護職古市市の城主松永彈正久に屬し、古市に居住することによつて古市を以てその氏としたそうである。故男爵公威氏は安政元年閏七月廿日に當時の江戸蠣殼町の姫路藩中屋敷に孤々の聲を擧げてゐる。幼名は兵庫郎次に造次公威は後に改名したのである。明治元年は丁度十五歳に當り、當時官立學校開成所に入學してゐるが、幕末の頃には後の文部次官とし亦帝國教育會長として、我が教育界の先輩たる辻新次氏に付て英語を學んでゐる。氏が廿二歳の時、東京開成學校の生徒から十一名を選抜して、我國最初の歐米諸國に留學生を出したが、之れが文部省最初の官費留學生であつた。當時開成學校から撰ばれた留學生の十一名中には、後の名外相たる小村壽太郎氏を始め菊地武夫、齋藤修一郎、鳩山和夫、平井晴次郎氏等錚々たる人物がゐた。古市氏も當時佛語諸藝科豫科一級生としてその撰に當たり、佛蘭西のエュールサントラル大學に留學して、主として工業學に付て研學大に勉めたやうである。

明治十三年八月氏は佛國留學より歸朝するや間もなく同年十二月に内務省土木局を拜命してゐる。當時氏の月俸は初任百二十圓で全くの異數であるから氏の友人等は其の優遇を羨望したと云ふのも無理はない。翌十四年六月には内務省准奏任御用掛を以て土木局事務取扱を命ぜられ、文部省御用掛を兼ね、又東京大學理學部講師として數學を擔任してゐる。

我國も明治政府が漸く緒に行く、明治十五年頃に至つては河川治水、港灣修築、道路の整備等漸く繁きを加ふに至つたので、氏は文部省御用掛の兼務を辭し、爾來専ら土木局の直轄工事の監督に當り、十七年には内務三等技師に任ぜられて新潟縣在勤を命ぜられてゐる。これは信濃川を始め、同地方直轄河川の改修と北陸諸縣に於ける地方土木工事の指導監督とにあつたのである。十九年五月には内務省二等技師となり再び本省土木局勤務となつてゐるが、同時に新設工科大学の最初の専任學長を兼任して、學部内の統制、學科の整備等に關して苦心努力を重ね、又内務技師と

しては、從來蘭人の手に委してあつた、土木事業の設計及び監督を邦人の手に移し、新に土木監督官制を制定する等土木事業と相俟つて土木行政上の政策に盡すことは多々あつた。

明治廿一年には、當時の内務大臣山縣有朋公に隨つて、歐洲諸國を巡回し大に公の信頼を受けて、歐洲に於ける工科高等學校の構成法及其の學術講習方法を調査し、他方東京市區改正委員會の委嘱によつて東京築港に關し、歐洲最高技術家の意見等を聴取なし、大に寄與する所大なるものがあつた。

明治二十三年六月最初の土木局長に任せられ、工科大學長及び教授は兼任となり、同年九月には貴族院議員に勅選せられたか、これが勅選議員の嚆矢である。廿七年には内務省土木技監となつたが、土木局長の方は都筑馨六氏がその後を襲ひて就任したが、廿九年二月都筑氏が罷めたので再び氏は土木技監で土木局長を兼ねるに至つたが、明治三十一年五月になつて、氏は後身に道を開く決意の下に、時

最上、河賀野、富士、大井、天龍、吉野、筑後の諸川を順次に國に於て改修工事を直轄施工するの方針を執るに至つたのである。然しながら當時は各河川共に調査實測の資料なきため、只た漫然と改修の大計畫を決定することが出来ず、又蘭人技師等は自國の河川工事の印象に慣れてゐて、改修計畫は河身の改良舟運の便を主として、洪水災害の防止を従とした傾向があり、其の實施したものは、淀川、木曾川、信濃川等に於ける水源山地の砂防工及び直轄河川の低水工事等であつて、土砂の流出を防ぐと共に、水制工護岸工等を施し亂流を防ぎ水路を調整するに止まつてゐた。然しこれでも改修計畫立案に必要な各種の調査及び測量を指導して、他日設計上に根拠を與へたものではあるが、明治十三年頃から、氏を始め山田寅吉、沖野忠雄、石黒五十二、田邊義三郎の諸氏が海外留學より歸朝したのと、其他大學出身の多數技術者も亦内務省に奉職するに及んで、茲に始めて本邦治水事業は蘭人技術者の手を離れて、本邦技術者の手に移つた次第である。

の内務大臣板垣退助伯が大いに惜んだにも拘らず、丁度帝國大學の方は總長沼尾新氏が引いて、菊地大麓氏が總長になつたのを機會として、工科大學長兼教授を辭する共に内務省の方も土木技監も土木局長も辭してしまつた。

茲で一寸維新前後に於ける、我國土木狀況の概要を書いてみるに、先づ河川の方は、沿川には幕府領、藩領、旗下等々と、犬牙錯雜その境域に接して、河川の狀態は自然的以外人爲的にも惡化せられて、年々夏秋の交になつたら必ず水害を伴ふ有様で、従つて各自領土の保安のみに焦慮して、他を省みざる結果、河川工事は概して自衛の目的に出で、他境を顧みざる有様であつた。道路關係に付ても概ね同様であつた。然るに維新後、政府は一般國土の保安上、重大なる利害關係を有する河川に對し、統一せる治水策を樹立して、之を直轄施行する方針に定めて、明治五年和蘭より技師ファン・ドールン氏を始め數多の工師を招聘して、六年始めて淀川の實測調査を行ひ、翌七年其の工事に着手したるを最初として、利根、信濃、木曾、北上、阿武隈、

氏は港灣に鐵道に道路に、其他上下水道等有ゆる土木事業に直接又は間接に携わり、その貢獻する處多々あるが、之れをいづ／＼挙げることは紙數に限りあるから省略するが、内務省在職中に參畫實行された土木事業の行政的實蹟を見ると、直轄工事に於ては、低水路改修に偏せし從來の方針を洪水防衛の計畫に轉じて、信濃川、木曾川等の改修計畫を整理擴張し、河川と共に新に大規模の淀川、利根川、及筑後川の高水工事の實施及び計畫に着手してゐる。又河川調査の事業を起して、本邦大小河川の地理的及び經濟的調査と相俟つて實測をなし、河川改修の科學的研究に進めてゐる。他而地方工事に於ては重要工事業に對する國庫補助に盡力し、大阪、名古屋、小樽の各築港工事業並に長崎、東京、大阪、神戸、横濱の水道工事を起し、更に民營事業に對し公共的利益のため、若松築港、利根運河、新潟萬代橋梁設等の企業を成立せしめてゐる。殊に土木局長時代に是連年地方災害の續發するにあつて、之れが復舊工事業に國庫補助を與ふる必要を痛感して、その緩急處置を誤ら

ず、災害復舊の調査、復舊費の査定及び議會の協賛を求むる等直接其の衝に當つて努力してゐるか、殊に明治二十四年十月廿八日突發した濃尾地方の大震災は、當時未曾有の大天災であつて、岐阜愛知兩縣下の被害最も劇しく、道路鐵道の破壊によつて交通は遮断せられ、木曾、揖斐、長良の三大川は勿論、各河川堤防は龜裂崩壊陥落して防水の効を缺き、復舊工事を急施するに非ざれば、翌春の融雪期には洪水に見舞はれ、罹災者は震災に加ふに水害の難をも免れざる状態に置かれたので、政府は同年十二月兩縣下の震災救済及び河川堤防工事費豫算外支出の件を第二回帝國議會に提出したが、不幸解散のために同案は成立に至らなかつたので、氏等の強固なる主唱に依つて、終に緊急支出に依り善後策を決定し急遽工事に着手したのであるが、當時出水期前に大要復舊出來得るや否や技術上幾多の困難が伴ひ、工事實施監督と共に氏の最も苦慮した所であつたが、極力關係土木吏員を督勵する外、新に多數の技術員を震災地に派遣して、更に第四區土木監督署長をして主要工事の

科大學長兼教授としての功績は或るひは右に出づるかも知れんのである。

元來工科大學の成立は歴史及校風を異にせる二大學校を合併したので、其の統制は他の分科大學の如く單純でなく、最初の専任學長としての氏は、學部内の融和、教職員の進退、學科の整理等々を始め、各般の事項に關して、細心の注意を拂つて、創業の功を全うせざるべからざる重大任務を帯びたのであつた。從て極めて困難な位地に立つてゐた。

その一例に見るに。學制發布に先だつて工部大學校在學生一同は特色ある同校の廢止を惜みて學生大會を開いて善後策を講じたるが如き、又土木學教授英人アレキサンダー氏が工部大學校廢止を遺憾として、工科大學長心得であつた菊地氏と争ひて容れられず、遂にその職を辭し歸國したる如きも、何れも當時の工科大學内の事情を物語るものである。其の際工部大學校土木科學生は全部作學旅行中であつてこの事あるを知らずして歸校後之を聞き、信賴せし恩師辭職に痛惜憤慨、中央卓上に教授の著書を置き、學生一

作業を監視せしめて工事の速成に努力した結果、能く所期の目的を達したことは、當時の地方官民の感激する所であつたが、その當時の記録は今尙残つてゐる。又地方水害復舊工事に對して、府縣が復舊費の負擔に堪へざる場合、國庫補助の例を開いたのも氏であると共に、府縣に於て國庫補助の恩恵を好機として復舊以外に過大の改良を企て、或は經濟的不利益なる設計をなすの弊を防止するため、検査内規を定めて、工事の種類、復舊の程度、工費の豫算等を嚴密に査定しめ、補助率に付ては、第一に復舊工費總額の十分の三を府縣の負擔とし、殘額十分の七の内、地租制限額及び戸數割金一圓迄の賦課を地方の負擔とし、其の殘額を國庫より補助するの内規を設け、復舊工費總額が府縣地租額を超過する場合には、別に特例を設くる等罹災各府縣の負擔力に細心の注意を拂つてゐるが、是れが現行府縣災害土木國庫補助に關する規程の根據となつたものである。

斯様に氏は土木局長としては歴代局長中多大の功績を擧げてゐるが、土木局長としての氏よりは、寧ろ帝國大學工同之を圍みて撮影し、遠く英國の同師に贈呈して、深く惻然謝恩の意を表し休講したるが如き、斯る時代に氏は最初の専任學長となつたのであるから、學部内にはアレキサンダー氏と意見を同じくする者も多數あつて、況や當時の諸教授は概ね工部大學校の出身者で、方面を異にせる氏の來つて學長たるを排斥するの氣風があつた。その間に多少感情の融和を缺くものも免がれ難き狀況である。然れども氏は資性極めて圓滑滑脱で敢て他と争はず、漸次部内を克く統合し、人心を收攬し、衆議を一和する點に於て、確に卓絶せる力量を持つてゐたやうである。夫れが爲めか幾何もなく學部内の一致融和を來たし、吾等の良學長と歡迎さるゝに至つたのである。

之を學科の整理に付て見るに、舊工部大學校に於ては土木、機械、電信、造家、化學、鑛山、冶金、造船の八學科、舊東京大學工學部では土木、機械、採鑛冶金、應用化學、造船の五學科を設けてゐたが、工科大學は兩者を綜合して土木、機械、造船、電氣、造家、鑛山、冶金、應用化學の

八學科とし、後更に造兵火藥を加へ、又鑛山と冶金を合して採鑛冶金となし、明治二十六年九月講座制の施行に當つて土木工學四講座、機械工學二講座、造船學二講座、造兵學一講座、電氣工學二講座、造家學三講座、應用化學二講座、火藥學一講座、採鑛冶金學三講座、材料及構造強弱學一講座、合計二十一講座を置いたのであるが、この講座の決定に關しては教授間に多大の議論があつたか、氏は學長として之れが折衝の任に當り、遂に圓滿なる解決を見たのである。其後明治二十九年五月に機械工學、應用化學を各三講座として、採鑛冶金學を四講座として合計二十四講座となつたのも亦氏の選擇決定する所であつた。氏の方針は單に學者を養成するに止まらず、科學的技術の進歩を圖るに在つてこれに大に努力する所があつた。氏の退職後も工科大學に於ては大體氏の立てたこの方針を繼紹して遂に今日の成果を見るに至つたのである。

氏の官歴事業等に付ては大略この位にして置き、今度は氏の性行及び嗜好方面に一寸と筆を延ばして、初代土木局長としての古市公成氏の稿を擲筆することにする。氏は天資明敏で人格は高潔で、毫も名利を求めずして、苟も恬淡清廉常に自己を没却して、専念奉公の至誠に燃へてゐたとほめても敢へて差支へないと思ふ。その專攻の學識は之を實地に應用して産業の發達に資し、その經世の才は之を行政上に施し、以て國運の隆昌を圖り殊に國際關係に於て、勉めて本邦の文化を歐米諸國に紹介して、相互親善提携に盡したことは、日本丁抹協會會長となつて兩國親善のため盡力したとや、白耳義のルーバン大學圖書館の復興事業に努力し、その結果レオポルド二世一等勳章を贈與されしことから見ても、單に一凡庸の技術者でなかつたと思ふ。氏は嘗て人に語つて曰く「余は學者に非ず、實業家に非ず、技術者に非らず、行政家に非らず、色彩極めて分明ならざる樞的人間と稱すべきか」と又曰く「學者は本來の希望する所は其の専門を以て終始一貫するにありと雖も、余の如く諸種の方面に關係するを余儀なからしめたるは、蓋し時代の然らしむる所なり」と、氏のこの言葉は事

實が立證してゐると云ふて差支なからう。即ち到る所可ならざるはなく、向ふ所適せざるはなく、學者たり技術者として最高權威者たるの外更に行政的識見と經綸的才能の多分に持合せてゐた人物であると思はれる。之れを裏書立證付らるゝ一挿話がある。

明治三十九年六七月の頃、公成氏は朝鮮から東京に出て來て兒玉源太郎伯を參謀本部に訪ふたことがある。一室に於て支那關係事件を論議したが、談偶々滿鐵問題に及んだ。兒玉伯は公成氏を以て初代の總裁たらしめんとて涉りに之れが就任を慫慂したが、氏は滿鐵の經營は單なる鐵道問題ではない。日露戰役の結果、日本が莫大の血税を拂つて獲得した國家の重大なる利権である。夫れ故に百年の長計を樹つ必要がある。これ實に國家の永遠の大事業であつて、私の如き木來一介の技術家出身者の出現する舞臺ではない。克く幾多の潮氣に満ちたる人士を頭使するの力量あるに非ざれば總裁たることは不可能である。故に私は適任者でないが私の見る所では、滿鐵初

長としての古市公成氏の稿を擲筆することにする。氏は天資明敏で人格は高潔で、毫も名利を求めずして、苟も恬淡清廉常に自己を没却して、専念奉公の至誠に燃へてゐたとほめても敢へて差支へないと思ふ。その專攻の學識は之を實地に應用して産業の發達に資し、その經世の才は之を行政上に施し、以て國運の隆昌を圖り殊に國際關係に於て、勉めて本邦の文化を歐米諸國に紹介して、相互親善提携に盡したことは、日本丁抹協會會長となつて兩國親善のため盡力したとや、白耳義のルーバン大學圖書館の復興事業に努力し、その結果レオポルド二世一等勳章を贈與されしことから見ても、單に一凡庸の技術者でなかつたと思ふ。氏は嘗て人に語つて曰く「余は學者に非ず、實業家に非ず、技術者に非らず、行政家に非らず、色彩極めて分明ならざる樞的人間と稱すべきか」と又曰く「學者は本來の希望する所は其の専門を以て終始一貫するにありと雖も、余の如く諸種の方面に關係するを余儀なからしめたるは、蓋し時代の然らしむる所なり」と、氏のこの言葉は事

代の總裁は後藤新平君を措いて他に適任者はない。後藤君今臺灣に在るか、その轉任か果して臺灣經營上差支へなくんば同氏は最適任者であると告げた。兒玉伯これを聞いて唯頷くのみで、何等可否をその席上で云はなかつたが、兒玉伯は後ち直ちに電報を以て後藤伯を東京に招致し、滿鐵初代の總裁たらんことを勧めたのであつた。後藤伯は稱や躊躇して一日熟慮の上確答することを約して兒玉伯とはその日は別れたが、その前日即ち明治三十九年七月二十三日兒玉伯は突然腦溢血で倒れた。後藤伯は之れを終生の恨事としてゐたが、遂に初代の滿鐵總裁は後藤伯の引受くることとなつた。

後日滿鐵の經營其の緒につきたる頃、氏は滿洲に赴いて各方面を巡視して滿鐵の將來に關する意見を後藤總裁に述べ、以て参考に供した如きは氏の性格の一面を語るものである。

今國策會社たる帝國鑛業開發會社の副社長をしてゐる男爵古市六三氏は公成氏の長男で、現在男爵家を嗣いでゐる

が氏が一寸と語つた處に依ると、父は常に家人に對して「余の生涯に於ける行實に二個の善事あり、一は學術研究會議に對して 皇室の御下賜金を拜受したること、一は滿鐵總裁を辭したること是れなり」と、常に云ふてゐたのである。これは恐らくば、滿鐵總裁を固辭したのは自から先見の明のあつたことを告白されてゐるのであらう。又兒王伯が氏に就任を懇願したのも、氏は單なる技術家でなく、政治的實際の識見手腕の具備してゐるのを認識したためであらう。

氏が土木技監兼土木局長を後進のため辭した時のことであるか、土木局長其他が相謀りて、氏に記念品を贈呈することになり、何にしようかと多分迷つてゐたが、結局記念品として金屏風を贈呈した。夫れには能樂の「翁」及「石橋」を以てしたが、この翁は川端玉章畫伯の筆、石橋は荒木寛政畫伯の筆で見毎のものである。この意味は、公威氏は能樂には定評のある程實に堪能であつたからでもあるが、その外に一つの意味があつた。これは高

ので、特に宮中杖を差許されてゐる。名譽此上なしと云ふべきか、翌九年一月廿八日八十有一の高齡を以て靜かに渋谷常盤松の邸にこの永き一生を終つたのである。

我が最高學府たる東京帝國大學工學部前庭には高さ約六、一〇米、底面約三平方米、重量約一五噸の立派なる記念銅像が起つてゐる。而して座臺に文學博士鹽谷溫氏の撰文であつて宮内省御用掛工藤壯平氏の書を刻してある。

先生譯公威。古市氏。姫路藩士族。夙立志工學。遊學佛國、歸朝奉職內務省、尋任帝國大學工科大學長。舉

深なる氏の人格を表象したものださうだ。即ち「翁」は能樂中の最も神秘なもので、これを演ずるには嚴肅で精進潔齊して別火たるを要するの秘曲ださうだ。「石橋」は文殊の淨土に獅子の牡丹の花に舞ひ戯れ、御世萬歳を奉祝するの大曲であるさうである。共に能樂中の最高奥傳の曲に屬し。氏の履々舞はれたもので、所謂人格を表すものださうだ。氏がこの送りものを殊の外喜んでゐたと云ふものもこゝに意味があるのでなからうか。

大正三年六月從三位に叙せられ、八年十二月には勳功に依つて特に男爵を授けられてゐる。次いで大正十三年一月には樞密院顧問官に親任せられてゐるが、是より先、山縣公が樞府に議長たる時、公の胸中には氏を樞密院顧問官に推薦するの意があつたやうであるが、未だその機を得ないであつたが、公退き濱尾男が議長となるに及んで、遂に推薦せられたのである。超へて昭和二年十二月には正三位に叙せられてゐる。四年一月には大綬章が授けられ、更に七年には從二位に陞叙せられて、八年には八十歳の高齡に達した

於帝國學士院會員。爲樞密顧問官。叙從二位勳一等。授男爵。昭和九年一月廿八日病薨。壽八十一。先生天資明敏。人格高潔。至誠奉公。一以國家爲任。好誘掖後進。最篤於情誼。博聞強記。熟慮斷行。識人善任。深得衆心和。是所以能裁詳議。收成功也。先生實本邦工業教育之鼻祖。而司鐸五十年。於治水港灣鐵道等公私事業。所盡力頗多。不讓大禹疏鑿之功。嗚呼盛矣哉。故舊門生敬慕不止。胥券資。建銅像於大學前庭。以傳先生之四功盛德於千歲云。

これで極く大略ではあるが、この稿を結ぶことにする。